



Title	Shakespeare und kein EndeにみられるGoethe
Author(s)	永沼, 更始郎
Citation	北海道教育大学紀要. 第一部. A, 人文科学編, 17(2): 108-114
Issue Date	1966-12
URL	http://s-ir.sap.hokkyodai.ac.jp/dspace/handle/123456789/3914
Rights	

“Shakespeare und kein Ende” にみられる Goethe

永 沼 更 始 郎

北海道教育大学岩見沢分校ドイツ文学研究室

Kōshirō NAGANUMA : Von Goethes Aufsatz : “Shakespeare und kein Ende”

この小論は Goethe の “Shakespeare und kein Ende” 論に祖述しつつ、そこにあらわれてくる Goethe 自身の自然観、人間観等をそのつどとりあげ、考察してゆこうと試みるものである。

Goethe は、多くの人々にいつも論じられてきている Shakespeare をさらにとりあげて論ずるのは、精神の特性が他の精神を永久にふるいたたせるにあるからであり、問題となるのは Shakespeare の作風が一般に何を影響しうるかということなのである、とはじめに論拠と問題の所在とをあきらかにしている。

“Shakespeare als Dichter überhaupt”

Goethe によれば、人間のなしうる最高のことは自己の認識であり、それが他人の心情をも内的に体験する導きを与えるのである。このための自然的素質を生まれもち、それを経験によって実際の目的へと錬成している人があるのだが、この錬成するということによって世の中と諸事件とからより高い意味で何かを得る能力が生ずる。詩人もこのような素質を生まれもってはいるがしかし詩人は、それを直接的地上的目的のためではなくて、より高い精神的、一般的目的のために構成するのである。

Goethe はさらに続けて次のように主張する、Shakespeare は最大の詩人である。もっとも楽々と世界を認識し、もっとも楽々と内的直観を語り、最高度に読者を世界の意識の中へと移すからである。またそれによって世界は、我々（Shakespeare 読者）にとって見通しのきくものとなり、世界のすべてが、それ以上のことが、もっとも単純な仲介によって我々に親しいものとなるからである。Shakespeare の作品が肉体の目ではなく、内的な感覚に語りかけるというもっとも単純な仲介によって、最高の、一番はやい伝達は、言葉によって内的な感覚に達する。目によって把えられたものが、それだけとしては親しみなく我々の心を深くゆり動かすことのない場合には、言葉は時に実りをもたらすものだからである。Shakespeare はまったくそのように我々の内的な感覚にむかって語りかける。また我々読者の側からいえば、その内的な感覚を通して想像力の形象界が生きてくる。このようにして完全な効果が生ずるのである。それ故にこそ Shakespeare の作品を読む場合にすべてが我々の目の前で起っていると感じられるのである。Shakespeare が効果をあげているのは、生きた言葉によってであり、それは読んでもらう場合にもっともよく伝達される、と Goethe は述べ、続けて次のように主張する。我々は読んでもらうことに

よって Shakespeare がさまざまな出来事を織りなすもとの糸をたどることができる。性格の描写に従って我々は一定の姿や形を思い描くのであるが、また同時に、内部で起っていることは言語章句の列りによって知らねばならない。Shakespeare の作品においては、劇中のすべての人物が一点といえども我々を暗がりには迷い残してはおかない。どんなことでも語られるし、一つの心が小心翼翼とおし隠していることさえも自由に白日に晒される。それによって我々は人生の真実を体験するのである²⁾。

では Shakespeare とは？

Shakespeare は Weltgeist の仲間である、と Goethe は言う。Shakespeare は、Goethe によれば、Weltgeist のように、世界を貫き通る。何ものもこの二者には隠されていない。さて、Weltgeist の任務が秘密を保持することであるならば、その秘密を我々に語り、打ち明けてくれるのが詩人の意義である。たとえ石がそれを告げなければならぬとしても秘密はあらわれねばならぬ。それ故 Shakespeare の作品では無生物さえもおしせまってくる。下居させられた一切のものが共に語る。一切の自然物が声をあげ、毎度共演している³⁾。

ところで Goethe のいう Weltgeist とは何を意味しているのであろうか。Goethe はそれに関してある時次のように言っている。「我々が何千年以来の人間の行動を眺めるならば、全国民ならびに個々の人間につねに一種の魔力を及ぼしてきたいくつかの一般的な方式が認められる。永遠に回帰し、無数の多彩な装飾の下にありながら永遠に変らぬこれらの方式は、より高き力から生に与えられた不思議な贈物である。もちろん各人がこれらの方式をそれぞれ独自の言葉に翻訳し、種々の方法で各自の狭められた個人的状況に適用し、そのため時には多くの不純物を混入するので、それらの方式はもはやその本来の意味においては殆んど認識されなくなっている。しかしそれにもかかわらずその本来の意味は、いつも思いがけない時に、或いはこの民族に或いはあの民族に浮び上る。そして注意深い研究者はかような方式の中から Weltgeist の一種のアルファベットを組み立てる⁴⁾。」Weltgeist のこのアルファベットを Goethe は精神的世界の「原理」として措定せず、自然的世界の「原現象」の中に眺め、世界歴史についても試みられるかぎりこれを試みている。であるとすれば、Goethe の言う Weltgeist とは自然的世界を深く知悉している精神という意味内容を有するのではあるまいか。Goethe は Shakespeare の Goethe 自身との共通点にスポットをあてて語っているごとく思われる。

Goethe の自然観は、自然を世界の精神的事象の単なる自然的舞台とみなす Hegel とは対立して、自然を世界の精神的事象の理解の鍵とみなしている。すなわち Goethe は植物や骨格、岩石や色彩に親しみ、あらゆる現象において真実で堅固で規則的だと感じた自然を研究することによって、彼のあの忍耐と注意力とを養ったのであるが、その際 Goethe は自然を恣意的に構成したり、本質の認識を強行したりすることをせず、現象そのものの方から現われてきてものを言うようをもってゆくのである。現象そのものの側から現われてきてものを言う——その言葉を聴きとる能力のあるもの、それを Goethe は Weltgeist と名付けているのではあるまいか。さらにはまた Shakespeare にその能力を、ならびに聴きとった言葉を表現する能力をみているのではあるまいか。

さて以上のように Shakespeare を自然界に結びつけて論じた Goethe は次に Shakespeare の非自然界との関連を考察している。Goethe によれば Shakespeare は文明社会の宝もまた十分に使用している。それは祖国イギリス——いたるところ光榮ある偉大な時代のイギリス——を通してである。Shakespeare はその正当な文化だけでなく、ゆがんだ文化をも偉大な明瞭さで示して

いる。彼はその時代に同化しているので我々をこんなにも動かすのである。また Shakespeare は人間の心の衣裳をよく知っている。そしてこの心の衣裳という点では万人平等である。それ故彼がローマ人をすぐれて描いているといっても、それは肉付けされたイギリス人なのであり、それはまたなによりもまず人間そのものなのである。

最後に Goethe は Shakespeare の個々の作品の根底には、常に異った観念が存在しているし、しかもそれが全体としてりっぱな効果をあげているのはたぐいまれである、と実例をあげて、“Shakespeare als Dichter überhaupt” を論じおえている。

“Shakespeare, verglichen mit den Alten und Neuesten”

Shakespeare の偉大な精神を活発に動かしている関心は、Goethe によれば、この世界のうちにある。彼の実人生の真実と有為こそ彼の作品を支えている大きな基礎だからである。それ故、彼の書いたものはすべてあのように真実に、また本質的にみえるのである。そして彼の価値は本来現在の上に置かれている。しかし詳しく観察すると、Shakespeare は決定的と近代の詩人であり、古代人とはとほうもない大きい溝によって隔てられている。それも単に外的形式によるのではなくてもっとも内的な、もっとも深い意義によってである、と Goethe は主張する。

では古代と近代ということ Goethe はいかに考えているのか。

Goethe は古代と近代とのあいだに古代的と近代的、異教的とキリスト教的、必然と自由、当為と意欲という対照を計えている。人間がこおむり得る最大かつ最多数の苦しみは、最後の二項の不釣合から説明せられる。そこから生ずる困惑が容易に解決できる些細なものである場合には、滑稽な局面の素地ができあがり、それが解決のできない最高のものである場合には、悲劇的局面が生ずる。古い作品の中で主として支配しているのは当為と実行の不釣合であり、新しい作品では、それは意欲と実行の不釣合である。当為は人間に負わされたものであり、その実行の不可能は恐ろしい。意欲は人間が自分自身に負わすものであり、人間の意欲はその天国である。一方では一切が運命であると思われ、他方では一切が自由であるように見える。古代の悲劇は避けられぬ当為に基づいている。この不可避の当為はそれを阻まんとする意欲によって、却って鋭くされ促進されるばかりで、それは古代の道徳法や法律並びに宇宙の法則に具体化されている。それは全体の福祉を目的としている。これに反して意欲は自由であり、個々人に力を添える。それは新時代の神である。そして我々の芸術や意向が古代人のそれと永遠に区別される理由はそこにある。Goethe はこのように古代と近代の対立を大悲劇について考えているのであるが、そのみならず日常生活についてもこの古代と近代の対立を明瞭に考えていたことは、次のようにカルタ遊びによってそれを説明していることから明らかである。

「カルタ遊びを一種の詩作としてみよ。これもまたかの二要素（当為と意欲）から成り立っている。この遊びの形式は、偶然と結びついていて、ここでは古代人が運命の形として知っていたのと全く同じ当為の地位を占めるし、意欲は遊戯者の能力と結びついていて、当為を阻もうとする。この意味で私はホイスト（トランプ遊びの一種）を古代的と呼びたい。この遊びの形式は偶然を、否意志そのものを制限する。私は、味方と敵が与えられると、私は手に入った札をもって次々と偶然を支配するが、もちろん偶然から身をかわすわけには行かない。オンブル（トランプ遊びの一種）やオンブルと似た遊びでは、反対のことが起る。これらでは、私の意欲や冒険に多くの扉が残されている。私は私の手に入った札を否認することも、違った意味に使うことも、半分又は全部を棄てることも、僥倖のたすけを呼ぶことも、それどころか逆の手で最悪の札から最

大の利益を引きだすこともできるので、この種の遊びは近代的思考様式及び詩作様式とまったく同じである⁵⁾。」

古代と近代を Goethe は以上のように把握しているのである。

では以上のように把握した古代と現代とに対比した場合の Shakespeare はいかにあるか。

Shakespeare は、Goethe によれば、古代と近代とを極度に結合している。Shakespeare の人物は当為を課せられている、すなわち制限を受けるある特殊なものとして定められている。しかし人間として彼等は意欲する、すなわち制限を受けず普遍的なものを要求する。個人の力を超える意欲は近代的である。ここに内部の闘争が生ずる。しかし Shakespeare はこの止まるところを知らない意欲を内面から生ぜしめず、外面的動機によって発動せしめることにより、意欲と当為の合一に成功している。それによって意欲は一種の当為となり、古代的なものに近づく。Shakespeare は当為と意欲を個人の性格において平衡せしめることによってこのように古代と近代を極度に結合している。ここに Shakespeare が他と比較にならないほどすぐれている点があるのである。Shakespeare がその作中の人物において古い世界と新しい世界を結びつけているさまは我々に楽しい驚きをおぼえさせるほどである。ここにこそ我々が Shakespeare に学ぶべき点が存在するのである。我々は我々の“Romantik”，すなわち近代性を過分に賞め揚げすぎることなく、一見して結合しがたく思われる対立でも、Shakespeare という偉大にして無比なる巨匠がすでに実際この奇跡を成しとげているのだから尚更我々のうちで結合することに努力すべきである。Goethe は以上のように Shakespeare に古代と近代を結合する者を見ているのである。

最後に Goethe は、Shakespeare は適当な収獲期に生まれ、生命に充ちた新教国に活動でき、そこでは信心ぶった狂気が久しく沈黙し、Shakespeare のような真の自然敬虔者に、何らかの特定の宗教とは無関係に、おのれの純粋な内心を宗教的に発展せしめる自由があったと Shakespeare の有利な点を挙げて、“Shakespeare, verglichen mit den Alten und Neusten” 論じおえている。

以上の Shakespeare に関する Goethe の論において、Goethe は Shakespeare の自身との共通面にスポットをあてて語っているごとく思われる⁶⁾。私はそのうちのいくつかをとりあげて Goethe 自身の思考を考察し、この小論をおわることにする⁷⁾。

「古代と近代を結合する Shakespeare」という Goethe の主張は、Goethe 自身にもそのまま適用される。ロマン派の一人である F. Schlegel できえ、Goethe の偉大さは「本質的に近代的なるもの」と「本質的に古代的なるもの」とを結合する点にあるとみなしている⁸⁾。Goethe は19世紀の歴史において古代と近代、並びに異教とキリスト教の差異をまだ裁決すべき問題と感じていない最後の人間だったのであり、彼の天性は古代を近代的なるものの円周のうちに現前しているのである。

「真の自然敬虔者 Shakespeare」という論もまた Goethe 自身に適用されるということは、“Weltgeist” に関してすでに述べたごとくである。Hegel などとは違って、世界史の進行の中ではなく、自然のうちに、Goethe は変化の法則——すべての生きるものにおいて絶えざる形態の変化、すなわち同一物の変態が行なわれているという変化の法則——を認識し、そこから得られた世界への自然科学的洞察を堅持していた。Goethe は自然を出発点とし、人間および人間の歴史の理解に到達しているのである。ゲーテのかかる実証主義的性質に基づく厳格な歴史眼の人間主義は次の対話のうちに如実にあらわれているといえよう。

「たとい貴下（歴史家 H. Luden）が今すべての資料を明らかにしてくわしく検査することができるとしても、何を見出されるであろうか。とうの昔に発見されていて、その確証を遠くを求める必要のない一大真実以外の何物でもない。即ちいつの時代にも、どこの国でも悲惨だったという真実である。人間はたえず脅かし合い苦しめあってきた。たがいに苛責と拷問を与えあってきた。おのれと他人の少しばかりの生活を不愉快なものにし、世界の美しさや美しい世界が与える生存の快さやかえりみることも味わうこともできなかった。少数の人々にのみ生活は心地よく喜ばしいものとなった。大抵の人々は、しばらくのあいだ共に生活を送ると、新たに始めるよりむしろこの世に別れを告げることを欲した。それでもまだかれをしていくらかでも生に執着せしめるものがあつたとすれば、またあるとすれば、それは死に対する恐怖であつた。また恐怖である。それは事実であり、事実であつた。おそらくこの後も変らないであろう。それは所詮人間の運命である。それ以上何の証言が必要であろうか。」

それに対して Luden が民族を持ちだしたとき Goethe は次のように答えた。

「民族も人間と同じことだ。民族といっても人間から成り立つのではないか。民族も人間と同様にこの世に生まれ、いくらか長く、しかも同様に奇快に動き廻り、同様に横死を逃げたり老衰や病弱のため死んだりする。人間の困窮全体と災厄全体はとりもなおさず民族の困窮と災厄である。」

じじつ世界歴史の本質はきこえのいい大事件にのみあるのではなく、ひとりひとりの人間の苦悩にも存するのではあるまいか。またもし我々が世界歴史において感歎し学ぶべき点があるとするれば、それは人類がいかなる損失、いかなる破壊、いかなる傷害の中からでも常に新たに立ち直り建設をはじめの力であり、忍耐であり、粘り強さなのではあるまいか。

次に、Shakespeare は「何らかの特定の宗教とは無関係におのれの純粋な内心を宗教的に発展せしめる自由のうちに生きた」と Goethe は主張しているのであるが、この論もまた Goethe 自身に適用されるということは、Hegel を「底意ある神学者」とみなしている Nietzsche が Goethe を「卒直な異教徒¹⁰⁾」とみていることから提測せられる。Goethe は、『『私は神を信ずる』』というの、うつくしい賞賛さるべき言葉である¹¹⁾。』といい、また、自分はキリストが持ちたいと思っていた、おそらく唯一の真のキリスト教徒であるとさえ言っている¹²⁾。かと思うと、「一体神の御名を口に唱えて、『私は神を信ずる』と告白できるものがあるか¹³⁾。』と Faust をして言わしめ、さらには、“Prometheus” 断片において、神々に対して反逆しているのみならず、キリスト教的信仰に対して攻撃を加えてさえている。Goethe のキリストおよびキリスト教に関するこのような賛否の間の変動は、不明瞭な動揺からくるのではなくて、中庸と節度を具えた偉大な“Vollmensch” の二者選一には捉えられない自由な立場に基づいている。

「この大地から俺の歓喜は湧く。この日が俺の苦痛を照す¹⁴⁾。』、さらには、「この俺の霊で人間の最上のもの、深甚なものを捉えて、歓喜をも、若痛をもこの胸の中に積んで、この自我即人生になるまで拡大して、遂にはその人生というものと同じく減びてみよう¹⁵⁾。』と Faust の口を通して語る Goethe の哲学的思索は、自我と世界観の一致をめざしており、“Wilhelm Meisters Wanderjahre”¹⁶⁾ においてキリスト教を人類が到達することのできた、また到達しなければならなかった最後として最高のものであると言明する Goethe の宗教感情は、キリスト教を人間性のうちに止揚しようとする。それは自己を人間として偉大にして自由なりと感じるところにその意味が存するとき宗教¹⁷⁾ であるとするならば、もはやそれは単なるキリスト教ではなくて、“Geheimnisse” 断片にも説かれてあるように、「高められた人間的状態の永遠の持続」を意味す

るものである。しかしてかくのごときを思考・感情を Goethe は自然探究によって培ったのであり、Goethe は神即ち自然という観念にたつものである。

「神の神学的証明は、理性の批判によって却けられてしまった。そのことはそれでいい。しかし証明として妥当しないものが、感情としては妥当する。我々はふたたび雷電神学や風雪神学などから、神を証明しようとするすべての同様な敬虔な諸努力を呼び出すのである。我々は稲妻や雷鳴や風雨のなかに「超大な力に近いものを、花々の匂い、ほのかな空気のざわめきの中に、やさしく近づいてくる存在を予感しないだろうか¹⁸⁾。」

Goethe は宇宙の神的なものに触発され、人間の内部の神的なものの存在を感じ、二者がかたく結びあうことを正しく感じていたのである。

「キリストに対してうやうやしく畏敬の念を示すのが私の本性に適うのかと尋ねる人があったら、私はまったくそのとおりでと言おう。私はそれを倫理性の最高原理の神的啓示としてその前に拝跪する。太陽を崇拜するのが私の本性に適うのかと尋ねる人があったら、私はそれにもまったくそのとおりでと言おう。じじつ太陽も同じく至高者の一種の啓示であり、しかも我々地上の子が知覚することを許されているもっとも強力な啓示である。私は太陽において神の生産力と光を崇拜する¹⁹⁾。」

この小論は、K. Löwith の “Von Hegel zu Nietzsche” (柴田治三郎訳) に負うところきわめて大きい。

テ ク ス ト

Goethes Werke. Hamburger Ausgabe Bd. 12. Christian Wegner Verlag (Hamburg 1963)

註

- 1) Goethe の Shakespeare に関するこの考察 “Shakespeare und kein Ende” が Shakespeare 論一般としてどこまで妥当するかは、ここでは、問題としない。
なお Goethe の Shakespeare 論としては1772年の “Zum Shakespeares-Tag” がある。
- 2) これに関しては “Zum Shakespeares-Teg” の次の文章を参照のこと。「Shakespeare の演劇は世界の歴史がその中で見えない糸につながって我々の目の前を巡ってゆくひとつの美しいのぞきめがねである。」(S. 226)
- 3) 「Shakespeare からは自然が予言している。」同上 (S. 227)
- 4) Goethes Gespräche in Bänden, herausgegeben von Biedermann, 2 Aufl., Leipzig 1909 II. (S. 419)
- 5) テクスト S. 292
- 6) これに関しては Weltgeist についての個所においてもすでに述べておいた。
- 7) Goethe は “Shakespeare und kein Ende” を、“Shakespeare als Dichterüberhaupt”, “Shakespeare, verglichen mit den Alten und Neusten” および “Shakespeare als Theaterdichter” の三部に分けて論じている。そのうち前二者において特に Goethe との共通面を語っているので、“Shakespeare als Theaterdichter” はここでは取り上げない。
- 8) Friedrich Schlegel から兄 Wilhelm へ1794年2月27日付の手紙
- 9) “Gespräch” I. S. 434 以下
- 10) 『ヘーゲルからニーチェへ』K. Löwith 著柴田治三郎訳岩波現代叢書 233ページ (第1巻)
- 11) “Maximen und Reflexionen” 第1
- 12) “Gespräch” IV S. 261
- 13) “Faust der erste Teil” 第3432行以下
- 14) 同上第1663行以下

“Shakespeare und kein Ende” にみられる Goethe

- 15) 同上第1772行以下
- 16) 第2巻第1章
- 17) 「しかし自己を人間として偉大にして自由なりと感じ得るところにその意味が存するようなキリスト教が、キリスト教本来の意義と合致するところ如何に少ないかについては、[ヘーゲルも]ゲーテも別段考えていなかった。」という K. Löwith の主張を参照されたい。『ヘーゲルからニーチェへ』I 26ページ
- 18) “Maximen und Reflexionen” 第9
- 19) “Gespräch” IV, S. 441以下